

タイムトラベル

三宅万理子

ふと思い立ち、庭の蔵、いや物置を整理することにした。十二畳ほどの物置は天井近くまで、ダンボール箱や古い家具や、古着が入っているビニール袋で埋め尽くされていた。

父母の介護に追われて長年、片付けをしていなかった物置は荒れ放題だった。虫の住まいと化した箆笥もあって、マスクと軍手で防備した私は悪戦苦闘しながら、一番大きなダンボール箱の中身を確かめた。ダンボール箱にびっしりと詰められていたのは意外にも、三〇年前に九二才で亡くなった祖母が遺した書物や写真、手紙類であった。



明治二四年生まれの祖母は高等女学

校を卒業した後、上京して上野の東京音楽学校に入学している。東京音楽学校は東京芸術大学の前身だ。祖母の実家の目賀田家は華族の家柄だったので、明治時代の女性でも高学歴が必要とされたのだろう。

祖母の父、つまり私の曾祖父にあたる目賀田万世吉はインターネット上にも出ている、明治の作曲家である。

ダンボール箱からは目賀田万世吉作曲の譜面が数曲分見つかり、彼の代表作が『鉄道唱歌（奈良巡り）』、『新曲胡蝶』と判明した。

1888年文部省発行の『JAPANESE KOTO MUSIC』なる古書や、

明治四二年発行の『THE ONE HUNDRED ENGLISH SONGS.』という西洋の歌集も出て来たが、東京音楽学校在学中、祖母はこれらの本で音楽を学んだのであろうか。

『山田耕作さんの髪が随分薄くなって・・・』と書かれてある祖母宛の郵便物があって、私は思わず、百年近い時の流れを忘れて吹き出してしまった。同時に、かつて祖母が「音楽学校で山田耕作さんはいつも女たちに取り囲まれていた。」と言っていたのを思い出した。大変残念そうだったので、ひよっとしたら祖母も学校の先輩山田耕作（有名作曲家、代表作赤とんぼ）に恋い焦がれていたのかもしれない。

ダンボール箱には写真も沢山入っていた。秀逸なのは大阪市の写真館で撮った祖母の見合い写真だ。写真の祖母は髪を大きく膨らませ、振袖を着てロココ調の椅子に腰かけ、手には卒業証書と思しき巻紙を持っている。晩年の痩せこけた姿からは想像もつかぬ、ふっくらとした美女が其処に居た。この写真で祖母は大阪医学校卒の祖父をゲットしたのかと思うと羨ましい。

開業医だった祖父の医学書も残っていて、『井上内科新書』とか、大正二年発行『外科手術学』で解説されている治療法なんて現代医学とは、かけ離れた代物で仰天した。

悲しい手紙もあった。それは曾祖父目賀田万世吉が自分の娘である祖母に送った手紙で、内容を読むと、婚家の下女が少ないと愚痴をこぼしてきた祖母への返信だった。

曾祖父は当時、病の床に就いていたようで、手紙の冒頭には、高熱がある、食欲が無いと綴られていた。しかし病身にも拘らず、曾祖父は『お葉書ありがたふ。すぐに御返事するはずのところ、手が震えて全く字が書けなかったため今日まで延び、あしからず。下女の居ないで御困りの由、さぞ御いそがしい事とお察し致します。内の下女も近頃全く役に立ちませんで閉口です。お粥も自ら煮ています。』などと祖母を労い、励ましている。

程なく曾祖父は亡くなったらしく、その手紙は、彼の勤務先だった天王寺師範学校主催の『目賀田万世吉追悼法要』の案内状と共に束ねられていた。人生最後の手紙でも娘を心配する親心に打たれ、私は不覚にも涙してしまった。

最愛の父親を亡くした祖母は一念発起し、強い女性になった。夫の医院を手伝いつつ、女学校の音楽教師の職を昭和十五年まで勤め上げた。

不思議な教科書がある。昭和五年発行『文部省検定済 師範学校及び高等女学校音楽科用 昭和女子音楽教科書』なんと、この本では、ベートーヴェンの曲には『楽聖』、モーツァルトの曲には『大和乙女』と勝手な日本語の歌詞が付けられていて、『楽聖』の『仰ぎて讃えよ楽の聖 あはれまたなき楽の聖・・・君逝きて年ふりて いや高し其の誉れ其の功』はまだ納得がいくとしても、『大和乙女』の方は『わが夫の君に か

はりましたし・・・あはれ時世の色を添へて 咲きでし花よ 大和乙女』ときた。自分の曲がこんな歌になって日本の女学校で歌われていたと知ったらモーツァルトは腰を抜かすだろう。

祖母が退職する直前の女学校は、さすがに戦時色が濃くなってくる。紙の儉約の為か、教科書も薄っぺらい。

昭和十三年発行『婦人愛国の歌』、昭和十四年発行(女声三部合唱曲)『婦人従軍歌』。

【前者の一節】

女と生れ おひ立ちし
少女は 妻は又母は
みな一すぢに丈夫の
銃後を守り 花と咲く

【後者の一節】

火筒の響き遠ざかる 跡には虫も声たてず
吹き立つ風は生臭く 紅染めし草の色

歌詞を読んでいて脳裏をよぎったのは、昔、テレビでよく流れていた、太平洋戦争に於ける学徒出陣の壮行会や、出撃命令を受けた特攻隊の若き兵士の姿だった。

私には家族の戦死、空襲などに耐える力はない。どうか今の平和が永遠に続きますようにと祈った時、洗濯機の終了ブザーが鳴って、私は現実に戻り、束の間のタイムトラベルは終わった。

祖母に纏わる物は全て元通りに収め、ダンボール箱の蓋を閉じた。物置に遺品が残されていたおかげで、祖母が歩んだ道をリアルに感じられたことは幸이었다。

もしも何時の日か祖母に会えたなら、明治時代半ばに生まれた少女が、不穏な世の中で勉強に注いだ情熱と努力を褒め称えてあげたい。

祖母の一生が凝縮されたダンボール箱を私は捨てない、捨てられない。